異なる文化の人々との出会いが醍醐味

地理

チーム内の絆を深め、台湾チームとの友情を育んだ台湾研修を経て、チームジャパン（石井智貴・灘高校2年、田中穣・東京都立桜修館中等教育学校6年、辻昂太朗・ラ・サール高校3年、筆者）は8月7日の深夜に羽田空港を飛び立った。大会開催地のインドネシア・バンドンは、標高約700㍍の高原都市で、熱帯でありながらも涼しく居心地の良い町であった。

大会を通じて印象に残ったことはフィールドワーク試験である。フィールドワークエリア全体を見渡せる場所で、与えられた空中写真から地図を作成することや、森林公園内を歩き、園内の施設を地図化する問題が出された。その場所の抱えるジレンマ（観光開発と自然災害）をどう克服するかという問題も出された。初めて訪れる地域を歩き、観察し、その結果やそこから見えてきた地域が抱える問題を、自分の言葉で文章化する作業はとても面白かった。また、遠足も楽しかった。ジャワ島最大級の火山であるタンクバンパラフ山の壮大な火口には圧倒された。

遠足でのひとこま（中央＝筆者、右端＝アレクタさん）

大会を振り返ると、人との出会いが思い出深い。一つは同室のモンゴルチームの選手たちである。最初は心もとなかったが、1週間も一緒に暮らすと親しくなるものである。彼らは私のメダル獲得を、自分のことのように喜んでくれた。いつかモンゴルで彼らに再会したい。もう一つは現地の大学生との交流である。特に、日本チームの担当であったアレクタさんは、とても親切で私たちによく話し掛けてくれ、チームをサポートしてくれた。彼らとのつながりをこれからも継続していきたい。

このように、地理を通じた異なる文化を持つ人々との出会いは、国際地理オリンピックの醍醐味（だいごみ）であり、自身の貴重で楽しい経験となったのはいうまでもない。不安を抱えて大会に参加したが、このような経験をしたことで、バンドンを離れる日には、ここにもっと長くいたいと思っている自分がいた。中学生の頃、思い切って国内予選を受けてみてよかったと強く感じている。

（井上尚多朗・広島学院高校2年、第19回国際地理オリンピックバンドン大会・銅メダル受賞）